

コ ラ ム

池はすりばちやさかい

背景に小さく東照宮の五重塔がみえますか。今頃公園内を歩くと突然小枝が落ちてきてびつくりします。見上げると、巣作りのためでしょうか、なれない仕事に取り組んでいるカワウの姿を認めます。3月も上旬になると池のカモ達もシベリヤへ帰ります。いずれ水もぬるみ、近隣の子供達が立札にかかわらず魚とりをやつてきましょう。彼らのうち年少の子をたのんで岸边に立つてもらふ。できればそういう写真にしたかったのです。

京都の小学生であつた私は夏休みを待ちかねては大和を訪ねたものです。そこでの遊びとして、せみとりは盆前でさえあれば公認でしたが、奈良盆地に多いため池での水泳は非公認でした。「池はすりばちやさかい」と祖母がいつもいつていたのを思い出します。

柵が写真のように池の中へ少し入つたところに設置されている場合には、子供がたとえ転落することがあつてもおぼれるに至るのは防ぐことができます。これとちがつて、陸上に岸沿いに柵を立てるのは一見ベストのようにみえますが、公園の景観を失なわない程度では、子供達によつてきつと越えられ、あるいは破られる宿命にありましよう。いつたんこれをぬけて池に落ちた子には、つかめる「わら」もないのです。こうみてみますと、池中に少し退いた柵、いや一本のロープというのは安全対策上極めて深遠な意味をもつことがわかつてきます。



ステンレス鋼の耐食性の話となるとすぐ出てくるものに孔食電位なるものがあります。この臨界電位は「ピット」の発生が起こる下限電位ですが、この「ピット」というのは半径数 $10 \mu\text{m}$ という臨界サイズを越えた大きなピット（二食孔）であると定義される。そうしないと、孔食電位以下でも小さな一臨界サイズを越せないままいずれは死んでしまう一ピットは出るという現象を説明できない、というのです（久松：鉄と鋼、63 (1977), p. 574; 防食技術、21 (1972), p. 503). 当時は恩師がなぜこのような「小さな」ことについて思想だの何だのと強調されるかがわからなかつたものです。この道を通うようになってもう13年を過ぎすうち、いつの頃からか、それはこの柵のことだと思ひあたるようになりました。少し進歩したわけです。

この場合の岸/柵-間距離は、子供が容易に飛び移れるほど近くても、また落ちた子の手が及ばないほど遠くても役に立ちません。いずれにしろ、子供の脚の長さ、跳躍力及び重力加速度等によつてその適当距離を決めることができましよう。腐食方面でも最近では成長性、すきま腐食の定義に先の孔食と同様臨界サイズ概念が必要であることがわかりました。実用的にも、たとえばイオン打込みによる表面改質での必要深さとして重要になると思われます。しかしこの方面では、数 $10 \mu\text{m}$ という臨界値を決めているものがいつたい何であるかということはまだ何も明らかにしえないうです。

上野には博物館・美術館が多く、動物園・水族館もおもしろいと思うのですが、馬車馬よろしく毎日同じ道を通学しています。最近になつて必要上、北方面へ歩くことがあり、駅公園口の先に「北部公園緑地事務所」の標札をみつけました。ここへ顔を出して都の係の人と安全思想の討論をしたいとも考えたのですが、とどまりました。いやーあれはボート客の逃散防止を目的とします、などといわれるのがこわいのです。夢は大事にとつておきたいものです。卒論仕上げに忙しい中でこの写真を撮影してくれました宮橋一郎君に感謝します。用済み後現れた5人のコーヒー代にも目をつぶることになります。(60年3月記)

(東京大学工学部 辻川茂男)

編集後記

この欄の執筆は、編集委員の持ち回りになつていそうである。そこで慌てて、先輩委員の書かれたものをまとめて読んでみた。その中では、会誌をより良くしようと言う提言が多いようである。それだけ、各委員のエネルギーが注がれていると言える。

「鉄と鋼」誌は言うまでもなく、会員が作るものである。しかし、申し訳ないことながら、自分自身そのような気持ちはほとんどなかつた。会費をおさめた見返りとして、会誌が配付されており、たまに、論文を投稿すれば気になるけれども、普段は全く他人事である。

ところが、編集の仕事の一端にたずさわるとなると、俄然、身近かな存在となつてきた。著者との折衝があり、他人の書いた一字一句が気になるのである。

とは言え、あまり肩に力が入ると良くないことは確かである。第一、自分自身の文章にすら自信が持たなくなる。

あれやこれやと迷うことの多い仕事である。

(S.M.)